

1 単元名 「テニピン」(ネット型ゲーム)

2 単元の目標

- ボールを操作しやすい位置に移動し、ボールの方向に体を向けたり、体を捻って打ったりすることができる。(知識及び技能)
- ラリーを続けるための方法を話し合ったり考えたり、選んだりしている。(思考力、判断力、表現力等)
- 互いに動きを見合ったり、話し合ったりして見つけた動きのよさや課題を伝え合っている。(学びに向かう力、人間性等)

3 授業の実際

○ スモールステップを取り入れた活動【視点②】

ラケットでボールを打ったり、ボールを操作しやすい位置に移動したりする感覚を養うために次のような活動を行った。

① 素手でボールを打ったり、キャッチしたりする活動(1・2時)

ボールをミートする感覚を養うための活動。ボールが今まで扱った中では最も小さいため、いきなりラケットを使うよりも素手で行った方が、ボールをミートする感覚を養うことができると考えて行った。素手で行うと、割と簡単に打つことはできるが、キャッチすることが難しく、ボールを操作しやすい位置に移動することが課題として設定することができた。

② ラケットでボールを下から打ち続ける活動(1～3時)(*図1)

ラケットのミートポイントを見つけ、どういう角度で当てると続くのか等の感覚を養うための活動。始めはなかなか続けることができなかった児童も繰り返し行うことで、膝を柔らかく使ってできるようになった。

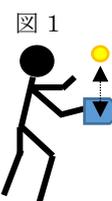


図1

③ 壁打ち1(2～4時)

ノーバウンドで壁に打ち、返ってきたボールをワンバウンドして打つこととした。ボールを強く打ったり、ボールを操作しやすい位置に移動したりする感覚を養うことができた。



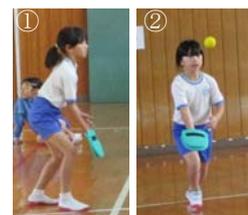
④ 壁打ち2(5～8時)

壁打ち1をする際、体より前で打つ児童が多く見られた(写真右)。この打ち方で強く打とうとすると、今度は壁に対して平行に立って行く児童が多く見られた。(写真①～④)

強く打つためには、・スタンスを壁に対して垂直に構えること。

- ・打球点を体の中心より前で打つこと。
- ・体より後ろで打たないために、打った後に少し下がる。

ということがわかった。



そこで、この動きを指導して繰り返し行ったところ、強い球で壁打ちを続けられる児童が多くなった。

⑤ コートで1対1のラリーをする(4～10時)

1対1のラリーは、めあてを「できるだけラリーを続けよう」とした。これは、試合形式ではなく、続けることを目標とすることで、単元の目標の1つである「(右利きの場合)右足をしっかりと横に踏み込み、体が横に向きやすい姿勢を作ったり、ボールを操作しやすい位置に移動したりすることができる。」を達成できるのではないかと考えたからである。また、色別(3色、各色8～9名)でラリー回数の合計を競うことで、もう1つの目標である「互いに動きを見合ったり、話し合ったりして見つけた動きのよさや課題を伝え合っている。」を達成できるのではないかと考えた。

○ ラリーを続けるための場の工夫【視点①】

コートの工夫

ラケットを使ったゲームに、初めて取り組むことや、ボールを操作しやすいことを考慮し、縦6m×横3mの比較的小さなコートで行った。動きが少ない段階では、適切であったが、より強い球が打てるようになるとコート内に入らなくなったため、縦8m×横4mのコートに変更した。コートが大きくなったことにより、強い球でのラリーが見られるようになった。

○ 主体的・対話的で深い学びにつながる手立て【視点③】

話し合いの場の設定

主な活動の途中に話し合いの場を意図的に設け、めあてを達成できている児童の動きを全員で確認しながら、どうやったらできるのか話し合っって共通理解した。例えば、壁打ち2を行う活動では、児童から、「足が壁と垂直になっている。」「体の前で打っている。」「強い球が打てている。」など、体の動きや力加減などについて共通理解することができ、その後の活動に生かそうとする姿が見られた。

4 成果と課題

○ 成果

- ① コートの大きさを変更したことは、児童の技能の向上に役立った。
- ② 話し合いの場を設定したことで、めあてを達成できている児童は自己肯定感が高まり、達成できていない児童に進んで教えようとする姿が見られた。
- ③ 色別のラリー継続回数で競うことで、どの児童も積極的に取り組むことができた。
- ④ 3・4年の合同体育で行ったことで、お互いに協力して準備や片付けをすることの大切さを学ぶことができた。また、互いの動きを見ることで学年関係なくアドバイスし合う姿が見られた。

○ 課題

テニピンでは、球を打つ時にネットに垂直に構えることや、打点を体の中心もしくはその前方に設定すること、体を捻って打つことが大切である。特に体を捻る動きについては、日常生活の中ではあまり行わないので、投の動作、ベースボール型ゲームの球を打つ動作などと関連付けて系統的に指導していく必要がある。